

江戸の〈政治的リアリズム〉を探して ——濱野靖一郎『頼山陽の思想 日本における政治学の誕生』 (東京大学出版会、2014年) 書評——

道家真平

はじめに¹⁾

まず、装丁が印象的な一冊である。鮮烈な赤を基調にして、頼山陽の肖像画と徳川家康三方ヶ原戦役画像が、隣り合わせにあしらってある。三方ヶ原戦役画像の家康は、足を組んで座りながら頬杖をついていて、悩ましく思案に暮れているようだ。一方の頼山陽は、斜に構えている。それはあたかも、思い悩む家康に対して山陽が視線を送っているかのようでもある。あるいは、山陽の視線を受けて、家康も心中穏やかではいられない、ということなのだろうか。なるほど、これはさては、『日本外史』という“反徳川・倒幕の書”をものしたことで知られる江戸後期の文人・頼山陽が、徳川御大家康をにらみつけているかのよう、意図して配置されているのだろう——。

例えばこのように²⁾、既存の〈頼山陽〉評価に引きつけて本書を手にする読者の期待は、ことごとく裏切られることになるだろう。濱野靖一郎『頼山陽の思想 日本における政治学の誕生』(東京大学出版会、2014年)は、「明治以来のほぼすべての山陽解釈をくつがえそうという」(同書帯)、野心に満ちた画期的な議論を展開しているからだ³⁾。本稿では、同書について、その内容を簡潔に紹介しながら、論点を確認しよう。

1 『頼山陽の思想』 骨子

同書の目次(章と節に限り、細目を省く)は、次の通りである。

序章 頼山陽とは何者なのか

第一節 既存のイメージ

第二節 主著の構想と成立

第一章 頼山陽以前

第一節 中国における正統論の系譜

第二節 日本における政治学の源流

第二章 「君主論」の成立——頼山陽

第一節 「勢」を論ず

第二節 英断の君主

第三節 統治の方法

第四節 統治の正統

終章 維新前夜

第一節 「正統」論の危険

第二節 公儀の崩壊

濱野靖一郎『頼山陽の思想』は、江戸時代の思想家〈ライサンヨウ〉に塗りたくられた「既存のイメージ」をことごとく退けて（序章第一節）、新たに（そしてそれこそが頼山陽自身の自負するところでもあったという）、「経世家」としての〈頼山陽〉を捉えようとする。ここでいう「経世」とは、「つまり政治」である（2頁）。それは、「知名度は高いが「通俗的な文人」程度であった頼山陽に対する評価を、「希代の政治学者」へと大転換させる企て」にはかならない（「あとがき」329頁）。

なによりも『日本外史』の著者として人口に膾炙した頼山陽は、維新から昭和戦前期における時代的制約のなかで語り継がれながら（それは時に意図的な誤読を伴いつつも）、「尊王倒幕のイデオログ」として知られる。または、その詩文書画への優れた才覚から「文人」としてのイメージを定着させてきた（1頁）。あるいは、濱野によれば、より扱いの難しい「誤解」としては、頼山陽をして「儒者」、「漢学者」として簡単に割り切ってしまうケースもある（2-3頁）。

しかし、これらの山陽評価は、頼山陽の自意識に即していないばかりか、頼山陽の著述全体の実態を上手に反映出来ていないのではないのか。濱野は、このような従来の山陽理解に対する違和感を手がかりに、重層する「誤解」の根源を尋ねていくなかで、山陽の著述のなかから、一冊の見落とされた主著を再発見する。それが、『通議』である。そして、濱野は、従来、その詩文書画か、あるいは『日本外史』、あるいはまた『日本政記』のみによって評価されていた頼山陽を、『通議』への徹底的な理解に基づいて再評価する。

この、『通議』の精緻な読解と、そこに示された諸概念を踏まえて『外史』『政記』を捉え直した地平に立ち現れたのは、濱野自身が驚きをもって観察しているように、「伶俐なる政治学者」頼山陽の姿だった（196頁）⁴⁾。

約200頁の大部に及ぶ本書第二章「君主論」の成立（83-286頁）には、統治の術数を深く思考する頼山陽の姿が如実に示されており、従来の山陽像を退けて「経世家」としての〈頼山陽〉を打ち出さんとする濱野のこの見解（文人×、イデオログ×、儒者△、漢学者△、経世家○）を支持しよう。

濱野によれば、この「経世家」としての頼山陽の偉大な業績は何よりも、「政治」に固有の力学や法則を、歴史事象から抽出し、しかもそれらを儒学流経書主義の規範意識から離れて理論化したことにあるという。つまるところ、頼山陽とは「政治学」としての学問を構築した先駆的な「政治学者」なのである」と、濱野は果敢にも言い切るのである（3頁）。

「政治学者」頼山陽。その当否を検討してみることが、同書中最大の論点となっている。

2 頼山陽の「政治学」

濱野が山陽を「政治学」誕生の画期として位置付けるのは、一つには、丸山眞男が『日本政治思想史研究』（東京大学出版会、1952年）において荻生徂徠に下した評価の仕方を念頭に置いているからである（3頁、また「あとがき」330頁）。丸山眞男は『日本政治思想史研究』において、荻生徂徠を、「道徳」と「政治」とを分かち、「政治」固有の領域の発見者として位置付けた。濱野は、これを批判的に継承し、この「政治」世界に固有の力学や法則を理論的に把握する態度の覚醒として頼山陽を日本思想史上に位置付けようとしているのである。同書副題の「日本における政治学の誕生」とは、このことである。

もっとも、そこでいう「政治学」は、第二章の章題「君主論」の成立に明らかにように、まずもって「君主論」であり、統治者が時々刻々と変化する治世の権勢を主体的に制御するための方策や統治術といった意味合いが強いことは注意しておいてよいだろう⁵⁾。というのも、同書はもともと法政大学に提出された博士論文が元となっており、博論のタイトルは、「君主」と「正統 頼山陽の政治思想」だった。この博論を単著として刊行するにあたって、「君主論」の側面よりも、「政治学」の側面を全面に打ち出す方針が採られた。これは、出版戦略としてみてみれば、新しい山陽像を分かりやすい形で力強く提示するための工夫でもあろう。

しかし、そのような戦略性を抜きにしても、濱野の眼には、山陽の『通議』が、特筆大書に値する「政治学」の書に映っていることは間違いがない。では、それは如何なる「政治学」なのだろうか。ここに、踏み込む必要がある。

ところで、今日私達が思うところの「政治学」とは、近代の用語であり、また近代の発想ではなかろうか。近代以前の世界には、近代以前の「政治」の在り方が展開している。そこへ、近代以降に整備された「政治」概念を持ち込むことは、場合によっては、近代以前の「政治」が持った多様な（あるいは異様な）広がりや、近代の「政治」の枠のなかへ閉じ込めてしまう（あるいはそぐわないものを捨象してしまう）ことにつながりかねない。

それに、もし近世／近代の「互換性」の問題が全く無いと想定したとしても、「これこそが政治（学）だ」と言い切ることは、政治という現象の多様性に、一つの「型」を押し付けることにもなりかねない（だが、あるべき「型」を提示してはいけない、というわけでもない）。

しかし、近世日本社会について該博な知識を持ち、政治学についても透徹した理解を示す濱野がこの問題に敏感でないはずがない。にもかかわらず、頼山陽をして「政治学」の誕生と言わずにはいられなかった感動の源泉を追うことは、本書の世界観をより良く理解する手助けとなりうる。手始めにまず、次のような箇所を見たい。この引用における下線部（＝引用者、以下同様）はポジティブな意味合いを持っている。

山陽の政治思想は、端的に言えば君主論である。「天下」・「統治機構」などにおける

「勢」に対し、責任を負って主体的に判断していく君主、これが主題である。(35 頁)

第一章「頼山陽以前」で、濱野は、頼山陽の「政治学」を準備した思想家として、中国から蘇軾、朱熹、方孝儒を、日本からは熊沢蕃山、荻生徂徠、太宰春台、尾藤二洲を検討している。その際、評価の基準となるのは、彼らがいかに政治責任に自覚的であるか、さらに彼らがいかに「政治的判断」の相対性に意識的であったかの二点である。換言すれば、「政治責任を負って決断する」(48 頁)という主体的な統治者(君主)が想定されているか否かが重要とされているのである。そのような政治観には、朱熹を筆頭とする宋学的な「理」(政治の現状分析とは無関係に追求可能な、アприオリな正解)から離れて、現状に即しつつ「選択肢を比較考量」(35 頁)する発想の出現を待たなくてはならない。したがって、例えば熊沢蕃山のような宋学流の政治(統治)観については、「正解のわからない中で、政治責任を負って決断する、という要素は存在しない。だから、決定権の所在を明らかにする必要もおそらくなかったのである。」(48 頁)という評価が下される。

しかし反対に頼山陽の「政治学」に連なる系譜のうち高く評価されているのは、荻生徂徠の弟子、太宰春台である。濱野は、春台の『経済録』や『聖樂問答』を読み進めながら、彼において、「行為(または行為における動機)の正当さよりも、結果に重きを置く」ような「決断」の重視が色濃く立ち現れてくることを指摘する(66-67 頁)。そして、「これこそ、日本の政治思想上で、「判断」が政治において重要な要素となった初めである」と結論している(67 頁)。

政治において、正解はあらかじめ存在しているわけではない。だからこそ、当面の課題に対して様々な条件を勘案し、比較考量した結果、決断するのである。(67 頁)

つまり、春台は「先王の道」に拘泥されない「比較考量を経た上での判断」(69 頁)を重要視し、これが頼山陽の思想へと流れ込んでいったというのである。その上でさらに、山陽『通議』「論権上」を読んでみよ、と濱野は言う。そこには、「東アジアの政治思想史の中で画期的な論」が展開されているのだから、と。

君の君たる所以のものは、何ぞや。曰く、「権在るのみ」と。権なるものは、物の由りて軽重を為す所以のものなり。家の此に由りて軽重をなす者は、能く家に君たり。国の此に由りて軽重をなす者は、能く国に君たり。天下の此に由りて軽重をなす者は、能く天下に君たり。(127 頁、頼山陽『通議』「論権上」の引用)

頼山陽は、君主の正統性を、いわば「権」を保持していることという機能面から定義した。ここでいう「権」とはしかも、「軽重を為す」、つまり、物事の軽重を計り優先順位を判

断していくことである。あるいは、そのようにして決定していくことそれ自体をも含意する。確かにここには、どこか福澤諭吉『文明論之概略』の書き出しにも似た、比較考量を経た上での判断といった契機が、先駆的に表出されている⁶⁾。

あらゆる選択肢を比較しつつ、事の軽重を推し量り、優先順位を見定めて、適切に対処できるかどうか。まさに、人の一生についてまわる判断力の問題である。しかし、ことこれが政治的な判断や決定の問題となれば、責任の所在が問われることになる。だが山陽は、この点についても、「君主」を判断主体として想定することで、政治責任の所在を明確にしているのである。濱野はこの山陽の透徹した君主論を、それまでの「儒家的徳治主義」(46頁)、すなわち、現実の政治運営では宰相を重視し、「政治の現場においては君主は不在」(61頁)の政治観を、画期的に一新するものとして捉えたのである。

つまり、濱野によれば、山陽「政治学」の真骨頂は、現実の状況認識に即しつつ、行為の結果に重きを置きながら、そのつどそのつど多様な選択肢のなかから相対的に最善と思われるものを責任者たる主体性を持って判断し、選択し続ける「リーダーシップ」(246、317、318頁)の重要性を打ち出したことにあるという。そして、そのようにして「政治」は営まれるべきだと発想する頼山陽であったからこそ、濱野は「政治学者」としての形容を惜しみなく与えているのであろう。

3 江戸の〈政治的リアリズム〉を探して

しかし、この山陽「政治学」の評価の仕方は、明示こそされていないが濱野が暗に踏まえている分析枠組を伝えていよう。

周知のように、現状分析に根ざしながら、選択肢を比較考量したうえで、結果責任の観点から常に〈ベター〉を選び取ってゆく政治的思考の在り方を、「政治的リアリズム」の問題として提示したのは、丸山眞男である⁷⁾。戦後政治学の祖とも言われる丸山眞男は、「政治的リアリズム」を、「何よりも状況認識の問題である」としながら、「結果責任」の自覚と「ベストはグッドの敵である (The best is the enemy of the good.)」という一言に集約される選択の技術を併せ持つ態度の獲得如何が、一個の人間や社会の政治的成熟度を如実に示すと考えていたのである⁸⁾。

どうやら、濱野が掘削した頼山陽の「政治学」の諸相は、これにピッタリと一致する。誤解を恐れずに言えば、濱野は、丸山流の「政治的リアリズム」の観点から頼山陽に光りを当てているのである⁹⁾。こうした濱野の作業を、近代概念の近世への持ち込みとして非難するのはたやすいだろう。しかし、この作業は同時に、近世思想史を時代的空間的制約から解放することにもつながるのではないだろうか。したがって、ここでは、濱野が掘り当てようとしているのは、時空を超えた「政治的リアリズム」の鉤脈なのだとはひとまず理解しておきたい。

ただし、そのことで生じる問題点も簡単に指摘してみたい。仮に、丸山流の政治学を意図

して継承しているにせよ、全然していないにせよ、「政治」の在り方をめぐって、濱野がこのような見解を抱いていることは、さらなる論点を必然的に用意する。なぜならば、丸山やその影響下にある戦後政治学の範疇に則る以上、その議論は戦後政治学が抱えている問題系に接続せざるを得ないからである。

一般に、戦後政治学は、政治における「決断性」と「責任性（結果責任）」を重視し、強いリーダーシップを希求してきたことで知られている。しかし、これが常識として流布した結果、いわば「決断」「結果責任」「強いリーダーシップ」といった言葉が紋切り型となり、それ以上の探求を妨げてきた傾向にあるのではないかという疑念が呈されている。これを最も鋭く告発したのは、森政稔「独裁の誘惑 戦後政治学とポピュリズムのあいだ」(2012)であろう¹⁰⁾。この森論文は、小泉政権や「橋下現象」など、昨今のアクチュアルな政治問題を考える文脈のなかで、丸山が礎を築いた「決断性」や「責任性」を重視する政治の見方とその不備が、現実の政治社会にも暗い影響を及ぼしていると指摘するものである。

これまで、優れた決断力を持つ強いリーダーシップの存在は、彼らが政治責任を全うできるという前提のもとで、奨励されてきた。だが、政治責任とは、一体どのようにとるものなのか、どうすれば責任をとったことになるのか。また、政治において責任を負うべき範囲とは画定可能なのだろうか。この点についての認識が深まらないまま、決断することと責任をとることとが混同されている状況が生まれている。そこでは、安易な決断主義が横行しかねないのである。しかも逆に、原理上履行できない政治責任を負うとされる責任主体を虚構することは、決断主義を呼び込む仕掛けとしても機能するだろう。いわば、「決断性」と「責任性」とは、再帰的に強化しあう関係にあるとも言える。これに対して、戦後政治学は、有効な解を見出せずに行き詰まっていることが、昨今特に指摘される問題系の一つである。結果責任がとれない（かもしれない）にもかかわらず、政治的決断を下す責任主体を想定することは、実のところ、かように深い危うさがつきまとっているのである。

思うに、この危うさは、「決断」と「責任」の君主論を展開する頼山陽にも、直接当てはまるのではないだろうか。山陽が、日本における政治学の最初期の形態を提示しているのならば、なおさら問題の根は深いとも言えるだろう。同書での探求は、濱野を、戦後政治学が抱える問題系の最前線へと導いたのである。

僭越の至りを承知で言えば、現代の政治学には回収しきれない、頼山陽の「政治学」の広がりをもっと大胆に集めて、頼山陽の思想から現代の政治学そのものを問い返す作業に、活路やヒントは隠れていないだろうか。戦後政治学が奉じる価値が揺れ動くなかで、それでもなお頼山陽を評価するとすればいかなる観点に拠るのか。マキャベリの君主論、ウェーバーの責任倫理、シュミットの決断、こうした戦後政治学が拠って立つ西洋政治学の範疇を取り払った地点でも、なお頼山陽の「政治学」は発見され得るのだろうか。

江戸の〈政治的リアリズム〉を探る旅は、豊かな成果をあげつつも、江戸から〈政治的リアリズム〉を問えるかどうかという宿題を残しているようにも見える。

おわりにかえて

統治理論書としての『通議』を中心に、頼山陽の思想を「政治学の誕生」として紐解いてゆく旅は、深く、新鮮な感動を与えてくれる。また、本稿では触れなかったが、終章「維新前夜」は、思想史研究のみならず幕末維新史研究への重大な示唆に富んでいる。さらに、本稿がまがりなりにも試みたように、政治や政治学を考えていく出発点としても、同書は豊富な論点を備えている。同書がより多くの読者の知的好奇心を刺激し、より多くの議論を引き出してくれることを願っている。

註

- 1) 以下、濱野靖一郎『頼山陽の思想 日本における政治学の誕生』（東京大学出版会、2014年）からの引用は、全て本文中に（頁数）、（該当章）（該当節）で示す。それ以外の著作や論文からの引用は、全て註で示す。
- 2) ちなみに、同書を読めば、幕末明治以来定着してきた「尊王倒幕のイデオログ」頼山陽というイメージは、頼山陽自身の徳川親から大きく懸け離れていたことが分かる。山陽本人は、徳川政権の正統性を支持していたからである。そうすると、この表紙は、打倒徳川の決意を持って家康をにらむ山陽ではなく、治世の衰微に頭を抱える徳川を憂慮する経世家頼山陽の姿を髣髴とさせる構図として解釈することができる。
- 3) 同書に先行する主たる頼山陽の思想史研究は、濱野も整理している通り、戦前に多く、戦後は停滞している。しかし、2014年8月には、濱野書の刊行と相前後して脱稿した斬新な頼山陽像を提示する研究として、島田英明「経世の夢、文士の遊戯 頼山陽における政治思想と史学」（『国家学会雑誌』第127巻第7・8号、2014年、122-193頁）が出た。この島田論文は、濱野書とあらゆる点で鋭く対立する見解を示している。今後、それぞれの結論や、それぞれの結論を導きだしたところの方法論の是非をめぐって、建設的な学知の交換が進展することを切に期待したい。
- 4) 他にも、「伶俐な政治学者」（231頁）、「伶俐で分析的な政治史家」（256頁）、「伶俐で分析的な政治学者」（265頁）といった表現がある。
- 5) 付言すると、同書が言おうとしている「政治（学）」とは何か、という指摘はおそらく博論の審査の段階や、単著編集過程において、すでにあったのだらうと思われる。特に、「政治」と「統治」とが少し重なりすぎている、という批判を受けていることは間違いがない。その形跡は、例えば、濱野が本書中いくつかの箇所で、「頼山陽は一貫して政治学者だった（それは「統治」の範囲に留まるとはいえ）」（182頁）、「彼は、普遍的理論として、政治（統治）学を追求している」（221頁）、「君主論の政治（統治）学」（263頁）といった限定を付していることから推測できる（以上、下線＝引用者）。
- 6) 福澤諭吉『文明論之概略』の書き出しは、「軽重、長短、善悪、是非等の字は、相對したる考より生じたるものなり」と始まる（岩波文庫、1995年、15頁）。そして言うまでもなく、軽重緩急の判断は、『文明論之概略』を一貫する鍵概念となっている。佐々木毅は、その点を捉えて、『文明論之概略』を、「恐ろしいほどの政治的リアリズムを捉えた作品」と評している（佐々木毅『政治の精神』岩波新書、2009年、109頁）。
- 7) 丸山眞男「政治的判断」『丸山眞男集』第七巻、岩波書店、1996年、305-345頁、また『丸山眞男講義録 第三冊「政治学」講義』東京大学出版会、1998年。

- 8) 『丸山眞男講義録 第三冊「政治学」講義』9-36頁。
- 9) あるいは、結果として丸山が唱えた「政治的リアリズム」の諸相と共鳴したというのが本当のところかもしれない。濱野氏本人に確認したところ、同書執筆にあたって丸山眞男を意図して援用したつもりは無いという。これは、その通りなのだろう。ただ、意識していないのかえてそれが丸山的な政治観と共鳴したということは、本稿の書評の領域を超えて、以下の二点で示唆的である。一つは、戦後政治学が、今もお丸山眞男の多大な影響下にあるという点で。また第二には、「政治」をつきつめていくと、結局丸山的なものへと辿り着くのかもしれない、という点で。
- 10) 『現代思想』第40巻6号、2012年5月、76-89頁。